

## 第70回 大阪府青少年読書感想文コンクール

小学校中学年の部 特選

◇プラスチックと魚とぼく 池田市立北豊島小3年 松本岳さん

ぼくは給食の牛乳が大好きだ。ストローで思いっきりグイッと吸い、口いっぱいに入ってきた牛乳は最高においしい。授ぎょうを四時間がんばった後のつかれが一気に吹きとぶ。しかし、最近、給食の牛乳からストローが消えた。直せつパックに口をそえて牛乳を飲まないといけなくなった。ストローから伝わる牛乳のおいしさが感じられなくなったどころか、あんなに大きな飲み口から一口のりょうを調せつしながら飲むことは不べんでたまらない。なんでストローがなくなってしまったのだろう。

そんな時この本を見つけた。「ストローとさよならしたのはぼくだけじゃないの?」「なんでストローが消えてしまったの?」その答えをこの本と一緒に考えた。まず、ストローやペットボトル、ビニールぶくろなどのプラスチックは、そのままずっと残り続けて、いつまでもなくならないことを知った。さらに、プラスチックが海にすてられ、海の生き物がそれを食べてしまい傷ついたり死んだりしていることを学んだ。

ぼくは考えた。給食のストローと魚の命どっちを大事にしたいのか。ぼくは魚が大好きで家でもかっている。大事なペットがもし海に帰ったらと考えると、プラスチックゴミのないきれいな海でずっと元気に生き続けてほしい。だから、大好きな海の生き物の命をゆう先したい。それがぼくの答えだ。

海の生き物がプラスチックゴミにどれだけ苦しめられているのかをもっと知るために、水族館へ行った。そこにも「海にはたくさんのゴミがある。」というてん示があった。そして、海の生き物を救うためにぼくができることを考えた。プラスチックせい品の使用をへらすこと。ペットボトルの飲料を買わずに水とうを持つこと。買い物には買い物ぶくろを持っていくこと。ポイ捨てされているゴミを見つけたらゴミばこに捨てること。これらの取り組みをみんなに広めていくこと。ぼくができる小さな行動がどんどん広がって、海の生き物を助けられたらとてもうれしい。

だけど、プラスチックせい品は人のくらしを豊かでべん利にしてきたことにちがいはない。なくしたくないプラスチックせい品もある。災害時にそなえてたくわえておくペットボトル飲料はぼくが考えるこれからも残していきたいプラスチックせい品の一つだ。魚の命も大事だけれど、自分の命や家族の命、人間の命もとても大切だ。だから、プラスチックと自然界の生き物が仲良く過ごしていくにはどうしたらいいかを考えていくことが何よりも大事だと思った。

人それぞれ必要なプラスチックせい品はちがう。自分にとって必要なプラスチックせい品をしっかりとえらんで、利用したら責任をもってゴミやリサイクルに出すこと。一人ひとりの意しきと責任がみんな仲良くくらせる未来への第一歩になる。そう思うと、大きな口を開けて牛乳を飲むのが楽しみになった。

(「さようなら プラスチック・ストロー」ディー・ロミート、絵・ズユエ・チェン、訳・千葉茂樹／光村教育図書)